

# 一里塚考

會員 内山英雄

## 一、やげん谷の一里塚

地下上申の前山代都濃郡中須南分（寛延三年提出一七五〇年）の中に「壹里塚やげん谷に有但銘小郡津市より拾六里式拾町高森より三里」とある。このやげん谷は、徳山市中須南より熊毛町八代字須野河内に通ずる旧道にある地名であつて、現在のの中須地番表に葉研谷と記載してあるから、このあたりの地形が漢方葉を調合するとき使用した葉研に似ていることから地名が生まれたのかも知れない。実際このやげん谷は、末武川の支流である境目川と錦川の支流である川上川にはさまれた坂道であつてここに一里塚がある。

ここに一里塚のあることは少年のころ聞いてはいたが、実際にこれを見て確かめたのは昭和四十九年に中須小学校百年史に一里塚のことを記載するため是非見ておきたかったがためである。終戦後須野河内に通ずる県道（今は国道三七六号線）が開通したので、やげん谷道を通ることはなくなったが、それ以前は重要な奥往還であつて、人馬が往来しており、時には嫁入り行列もあり、又高森天神祭や中須のお大師の縁日

などには三三五とこの道を往来したものであるから、ここにある一里塚あたりは恰好の休憩所になったことと思われる。やげん谷の一里塚は、周囲を花崗岩の小石をもつて積みあげて作つてある。下側の径約三三〇cm、上側の径が約二五〇cm～二七〇cm、高さ約八五cmある。一里塚は、一般に土を盛つたものが多いそうであるが、ここは周囲を花崗岩の小石によつて積みあげられて作られておるために今日まで完全に保存されておるのである。幸いこの附近は花崗岩地帯で、小石を集めるには容易なところである。高橋文雄氏著続「山口県地名考」に、「一里塚とは一里ごとに築いた塚のこと、「信長記」に天文九年冬（一五四〇）足利將軍が諸国に命じて四十町を一里として一里塚を築かせ、その上に松か榎を植えさせたとある。この後徳川秀忠が慶長九年（一六〇四）二月東海、東山、北陸の三道に一里塚を築かせたことがある。一里塚を現在のように三十六町に定めたのはこの時のことで、これらの多くは明治以後になってとり除かれたが、残つたものもありと記述され、又大正十四年発行の三省堂最新歴史年表によれば、「慶長九年家康二月東海、東山、北陸に一里塚を築造さす」とのことがあるので疑問に思つたのは、家康の命によるものか秀忠の命によるものかのことであるが、慶長十九年であるから將軍は家康である。ところが本会友浴井氏の一里塚



記に家康が秀忠に命じて築かせたと述べられておることにより、この疑問は解決したことになる。やげん谷の一里塚には現在赤松が一本残っておる。一里塚には榎か松が植えられたそうであるが、御承知の如く山口県の県木として赤松が指定されており、中須南は赤松の適地で、築造当時より赤松が植えられたと考えられる。現存するものもその子孫ではなからうかと思われて、何か懐旧の情切なるものがある。

## 二、檢余地と大道理方面の一里塚

やげん谷から次の一里塚は今の周東町瀬越なせこ檢余地けんよちにあって小郡津より拾七里式拾町、高森より式里という記録が三丘五ヶ村風土記にある。檢余地の一里塚も現在は全く崩壊して地名として残るほどのものである。ここからあと二里で高森ということになるが、高森に行くまでに上代坂という険峻があり、これを上下したので昔の旅が思いやられる。やげん谷の一里塚から小郡津に行くのに須々万、長穂を通過することになるが、このあたりに一里塚のあった記録がないが、次の大道理の中村東原に小郡津市より拾三里式拾町、高森より六里という記録があるので、中須のやげん谷から大道理の東原まで三里あるからこの間に二ヶ所の一里塚があったことになるが不明である。中須から須々万に通ずる道も今のバス路線でなく、中須相地から下松市内にある今の白須那ゴルフ場のあ

たりに出て須々方に通ずる道があったので旧道は全然通ることとはできない。

### 三、その他徳山市内の一里塚

市内に残っている一里塚では、やげん谷の他に中須の旧隣村須金(須万)の桧山にある。桧山はひよ山と地下上申にある。このものは土盛り塚であり、今日までよく残存したものである。今私私有林の中にあつて桧の植林がしてあり見つけるのに困難である。ひよ山道は藩政時代萩、生雲、徳地、鹿野、金峯、須万、本郷、廿日市、広島と参勤交代の道としても利用されたこともあると伝えられている。

この他徳山市内で記録にあるものをあげてみると、戸田村戸田山の上、夜市村の新土手縄手、徳山村の浦山の下、一の井手、杉ヶ峠、遠石村の念仏坂、小畑村のさやの本、下上村の梶原、中野村の耕ヶ床、河上村の掛の上、大道理の東原、大向村の一本木、須万村の上長谷及び朴など計十六ヶ所あることになる。やげん谷、ひよ谷の他は現時点では発見されていないので、これからの調査により一ヶ所でも発見できることを期待したい。拙稿を綴るに当たり浴井先輩よりいくつかの助言をいただいたことを附記する。

註 一里塚については「國史大辞典」の「一里塚」を参照されるよう望みます。(編者)